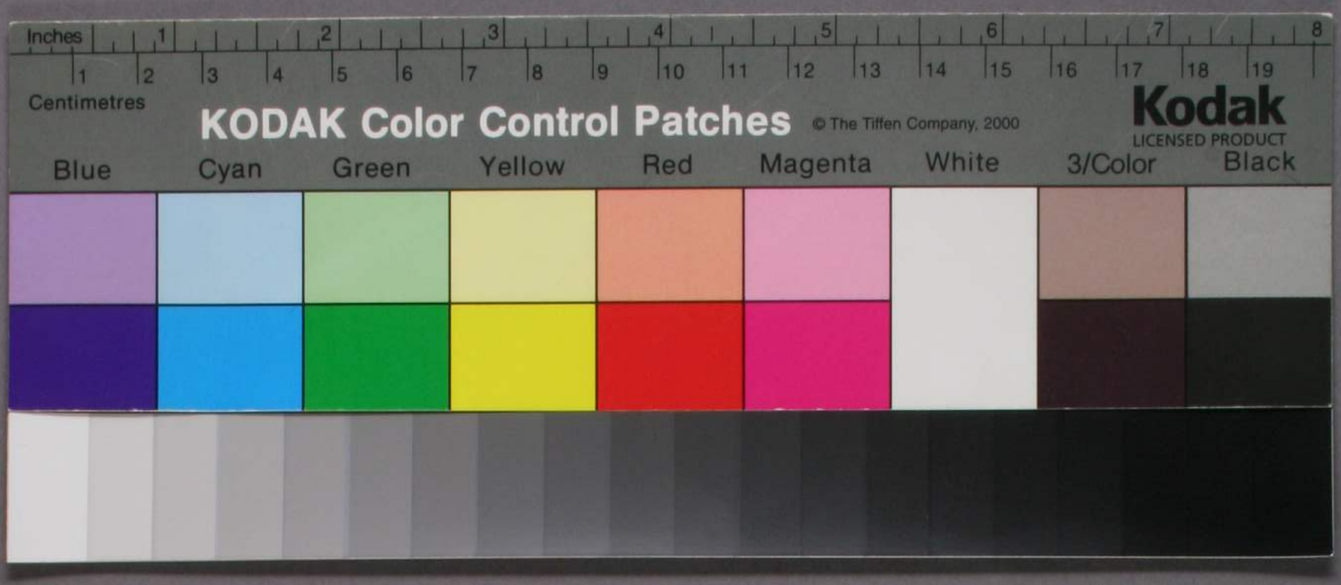

あゆひ抄

三

ホ 2
4238
3

利 873 ホ利2 9017 東京學校圖書 門 ホ2 4238 巻 3

あゆひ抄巻二目録

十九家廾二上

曽家一

何そ（つゝむそ／よそふそ）
何こそ
何こそハ何（めくら寸中のこそハ／あつらけ乃こそハ）

乎家二

何をと（かゝるをと／はなるをと）
何ものを

波家三

何ハ（よそむそ／ふゝろも）
何そ何（めくら寸中のそ／あつら中のそ）
何こそ何（めくら寸中のこそ／あつら中のこそ）
何てを何　何とを何　何心をと何
何もそ

毛家四

何をも　何をや何

何もそ何　何もこそ何（いかなるもこそ　何もこそ）　ひかるもこそ

何にても　何と何と

仁家五

何に　何に何

何にて何にして

止家六

何と（いつのと　かなると）（ふのと　りなと）（ときのと　へなると）　何てよ

何とも（ものとも　りんとも）（ふのとも　りなとも）（とほとを　へなるとも）　何とす（ことす　まとす）　かとす

志家七

何し　何しそ何

何しこそ何　何しろ何しかも何しつゝ

何しも（露ならしを　かへすしを）

何し何しも（あらますほのし　見るゆかし）　何しそ

あゆひ抄巻二目録終

あゆひ抄巻二

北邊口授　門人　吉川彦富
井上義胤　筆受

十九家　才二上

屬家

凡[ぞ]はそれ[こそ]はこれぞ定をつむるあゆひなるが光をわきしてかたはらをされし事物を一すぢにさしきはめていふ詞也。今の世人の石をもと純人のあるなどいふ重なりいぞまうむもとを婦るも也。又またをとてありてわのよまとりてそこれをそまうまうとは魚し○[ぞ]はいるゝ[こそ]いせゝし[こそ]はなりきかりかゆらく[こそ]はせゝ絶かり

ならはしとて文詞によりて【ぞ】とはかりいひおきてはいはゆる
うけ【こそ】とせらるゝさましもあかぬさまへいひ
ならぬく其のそよ○そといふはあるものさまあれとも。ぞへ
とかくもあれと。是はいひおきて文のひゞきにうつ○こそと
いはれ。おもむきそのうけのねらひくれゆく結のかたのは
是ともくいひ置かこれをなるべくよさ見えけれ【ぞ】はゆく
【こそ】はつよきこと文たとへば今のひゞきゆゑをのかしこし
うけあひてよ○ぞといへ。はなむきいはへ結のつよくあらず
とかねていへる発明そよくわかるそとよ○こそといへあく
麦をとものゝ絶えていひ下したる時までこれはかくれ。かゝ
てゆるく詞とるなりて一家にありてはんと

ならぬをて見え無し【ぞ】を【何のしらず】【こそ】と【何ものかな】
と是するも。此とわかるを書きそとある也○【ぞ】は物のかゝはりと
ますきれあるをとぞのましは第。肝心なるをとりてしめは詞
也【こそ】は外なるものをとりかゝりつきて。肝心なるゆゑ結ひて
おく詞なり○【そのこそ】【こそぬぞ】あるかゞみくもねかくもいふ
まとう絵かく書のひとつはかゝえしてよみあるますくれのうは

何ぞ

二例○第一【うれしきぞ】といふ（何は若紫の巻の源氏の御歌也）里【ぢやぞ】といふ。
此をとうける時は【のぢやぞ】といふ
人しはれぬるまかくもひつをさ地名ぞ見たいまし也と
若めてとあるそをとこ思しいかにも雪と人のかゝるれ
○第二【うつくしきぞ】といふ（何は上に同じ但末顕はなく）里言同じ。此をとうける

なほ［のぞ］とうけて。又背てかゝりていへるもよし

於　こゝろむしさへゑろひはかへむしきれ松のかすをしらぬよくひくとぞ。

曰　ぞもとめる松の下葉も絶つくしてむかしの志りしみなからそへぞ

［ぞや］（ゾイツ）［ぞも］（ゾサテモ）［ぞは］（ゾコレハ）［ぞかし］（ゾサテモゾイヤ）［ぞやも］（ゾイツサテモ）［なるぞも］（テンモタヅ　ゾヤゾサテモ）など見な抔

反捨きくりかくれのあかくの人にきそうあ我ねかきん

事たやうらも册くうらめいつろも所こそあ頃也とりく

手あまえるやむしの人もきこめすてをくむ。あかのうち

いそくよりかん人え［ぞも］とよそよくけめとあかゆ［ぞも］の［ぞ］すそ（よ其りず御）

（のことわりしるしめくかゝす　してよむハ字くとすの）

何ぞ何　二例○第一［めくろす中のぞ］といふ（上句ハ名詞の引廃御表也下句ハ名也）名詞御をとうくる時里［ぞ］を［が］というべし。詞をとうくる時［乃］（が）

手引してかは［ぢやぞ］とつめてなほすべし

大かたは月をもめでじこれぞ（しが）このつもれば人の老となるもの（ぢや）

そのうへうらうの趣ある歌の表わてあそぞ（が）と云ぢぞ（ぎやヅ）といへましものを

○第二［あるる中のぞ］といふ（上句ハ名詞の体引廃ス御表也。下句ハ詞の引廃御之）里言［これハ］といふ表は［何のしるし］といふ。但上句はつゞきて四様あるべし。一若なる時［が］とうく（但あるは体言でも我そあかもるとむのへていふ時え［ぞ］とうけ拘　そ時の知そうるをと［と］とうるえひハ時このそこてひと用へ。ことくみえいさへうす文［と］とうく合ぞくひハ　第二様のごとく［ぞ］をと上句のちまりてよむ）二体言のきしうするる時［ぞ］を上句のよふまそして心得べし。三体言の引廃ある時［ぞ］（が）［乃］（が）なとうく四あゆひのきしめる時えおとかしとうあすてあそち手里してよし。又下句ハ枝の引廃まそこゝめよそなさ去すくなきるく枕をまゐ丁詞え［ぞ］を［え］にあして下句手［ぞ］をうつく

るもよし

ゆくらちる花のこころやまされるらん（ガ荷甘ジテ）ふきてくてちる

こゝ思ひてわかるかむよりかもなにとも心えんたれ（ガコチヤ）か行き

梅花さかりをへてくる山やなるまて中まて（何ガネ知）●そくそみけ

かりともおもひ（コチヤ）いそ●えぬ昔よりとある人つらぬ林わよ物まて

かこり取くちるそめて（ヂガコチヤ）も梅花みて世中そそのこたまは

しくれつゆみけるよめもこの葉わやかわ林まあ今（コトガコチヤ）そわりき

そのこ歌よくる梅にもあるわくもしのねきけ（コチヤ）え出えそうわき

よわの山さくその殊まもしけりわおのみくはく、八重（何セシズ）とそ鳴

上よ｜と｜とて｜ふえ｜さ｜ら｜も｜こをつきト｜ぬ。｜ろん（コチヤ）｜ん（ウ）｜ら（ソナ）と手合ひ不拘

ソニ思バル　へき｜デアロ　らん｜タデアロ　らん｜タコソウチサテモ　らしも｜タ　し｜タハ　しハ｜タニ　しに｜タノニ　しを｜タコデ有タレド上　しかと｜（コチヤ）｜（ウモノ）

かくてこちらのひとつ例をもつなかへし。こそなどいふ詞の係

るは〳〵。ぞなどへも古今にはひとつもまれなることもいへ

あひ歌のゆくつくをかくなりまするあるむ。けるあけらつよみ

まへども。ためわ（なむ）すてこちあへき格なれども手。例

のよまてる詞なまでいゆてあひ格とよくまりてめくらは例を

す。文あめてよりまりてあてる例をもらへし○（こそのそ）序

こりかのこし（そそ）とよむ。文の（さ）詞をへて（ゆそ）

とよめる（こそれぞ）おわしみてそれをそまの客の袖くは（も）

ぬれわそぬまての都世。くりくそ（仁家）よりて○物わそ有法

おりくそかけるなと（も）わくよあるを。えきてあくきそ物まけり

くそくきかけるを。中ころのみへつゝまかわ（不倫）と通つ

ゆくへのこゝろはこそあれといふことを里言にこそあれだらうのこと○上句ハ壮若の引麗下句ハ状乃引麗そあらそうれしき花くそ咲かさかむを中若伊仏の人おゝうまし咲の仏りしさかとかへてをよめり○いそにハまころハのこそおやきまむそハこゝろ○集古今にて花まくのねといそさゆのなりけるといふこゝのあかめつらしき例也

何こそ

これをつゆこそといふ（何ハ係条又同）

（但又於）あふみのさゝへ手とハ魚ねまとも知ハこゝもうへよねそこ○○ゑ川のくにのるまハ杭えす山しろねとそふあなん事をのこゝろ○○思ひ（蘆芳）こひしきつゝかき来ゆそひねれハ物ハいつれてなするこゝ乃うそ○○苑としよろゝめ右まつゝくるのこゝとくすれ前こそ不下りうち合を

くらへてみうへきなし

これハ中昔よの中こゝろまていよあるあゆるへ也但風雅集よりをしようつめあまてそきまいハ次乃中のこそとかへ里川めよふころなつなかなかへ例こそねそなおさぬあなかとかり

何こそ何

これを中のこそといふ二例○第一めくら寺中にしそといふ（上句ハ名詞の引麗社ひ脚さありし也下句ハ名也）近むりしよわさなハ名のぬ例也里そみるハ二例とも同しそれハ奥にいふ但此例ハ下句乃下にきこゝいふと合くらへて知るへし

（拾古）ふつまそれよみのとこそ絶なし秋月しくれなゆうのもや

（拾子）かきをとしれのその御まし歌へこそうらてそなきの此山の哉のこれ

○第二 あるは中のこそとうけて（上何おちて同じ・下何ハ其の目に靡伏術也）

春の夜乃やミはあやなし梅のはな色こそ見えね香やハかくるゝ

そこひなきふちやハさわく山川乃あさきせにこそあた波ハたて

折つれハ袖こそ匂へ梅乃花ありとやこゝに鶯乃なく

枝よりもあたにちりにし花なれハおちても水のあはとこそなれ（外デハナミニ）

うきことを思ひつらねてかりかねのなきこそわたれ秋のよな／＼（外ツナミニ）

志のゝめにひしき附きあしきの山より月のいでゝこそ知れ（何カヤメテ）

あひ見まくほしハかすなくありなから人につきなミまとひこそすれ（何モセズニ）

かはきゆくひさしく来わたるよりこそ涙さへこひの流れ（ナツヨリモ）

神なびのミむろ乃山を秋ゆけハ錦たちきる心ちこそすれ（ナンブンナミニ）

序言ふをいへのこゝろ梅をむの二句見渡して詞也。又こゝに梅を

えらびすてゝ梅をとりてこゝにそへてこゝろ也。この中より

むかしこそとあるハあるはさ。里言とわかくきこえてそうらぬ

そのかむりの五文字をかくしてよむこゝろのこそわかれきこゆれハ

一の里言をとめて見しかりし こそ をきわめる。詞の上あるハ下ハ

何よりも／ひとよりも是／それよりも／なんの事わいさ／すでハあけり

おのゝゆあいさ／何のやめて／何も其ずふ／そ是ほよう〻／それとちがへぞ

あと極この詞ハおへて知るべし。又詞のいきおひゆるやかなるを

ハ、ぞく〻 是だゝの八 と里ほうもよういひそねまさ○えこそわく

らねなとの類なれ ど。ぷ。て。ど。 などるもの上にあるハ川きゝ

川きべれ	ツギヤ
川きなれ	タノギヤ
あれ	デアル

あらめ	デアラウズレ
らめ	デアラウ
けらめ	ズニ井ウズレ
てめ	テ置ウ
あめ	テ居ハウ
しり	タニデ有シ
らし	ソウナ
らしを	ソウナサテモ
を	ノニ
ま	○
と	○
とも	○○
とても	上ニテモ

あるをこそとうける引合見なさい

すへて［こそ］とよめる詞。かゝりては末を只にいへる（二）ハ必ゆつる詞にもなれバ事と里言をあつる也。すへてかゝるあひだ也。古今に媚しかめかくそまかぬあのこゝろ。又歌なるは。蜻蛉日記に思ひこそやらるれといへる詞なども多し。くもわかるゝ詞もいふ事を知る也（思ひ出る事ども多かり）○又下に［と］［とも］［とても］［ても］［まで］なるとうちあへるハ里同。すへてものへものある事のハなし。右の［と］［とも］は下をうちあはせると同じ心なれど志るなるべし。又風雅にハ下に［招り］とまであつかふあるを。なれど捨る例あり○又かくてそうちあはぬやう［中のこそ］よのつねし。後撰にあるれて事うつれてくるのこゝろ頼や人をたのむなるらむ。古今に相見てはつかひにこそこのうちにまつやみよとうちわするらん。めの聲ハ家とあそびて○その口のこふのを也。かくあるや人とおもふあらんとつめあはせの所をんぞそこまでとあるを例なるよし。詞そかくしあれど。又定家卿のうたにてあるその大臣歌の歌とよみたる所へ古今にこの○そかくたる例なり。大臣はみやこし○［そのこそ］序にかゝるこそし（かゝえて）い浮事なし。さうしたるの歌及ぶ也○又つぎ○詞を重ねて［ふこそ］とよめる今あり。上何をまつらむ也。後撰にかゝれり志られとなにかするものまでれのそれなりにもあれ世をこひあやくうつくしき［仁家］ふに

何そハ何

（上下何お係る例）里言乃なにゝぞ。全［中乃こそ］に同じ。其も

めくらしとあくらしとの二例ありめくらしハ常によむ也。

（拾遺）風ふけハひとくさ乃末葉露かしこ（外デハナシニ）こそハ神のみ風也

とふひのくへあかぬまて人まつ○○○（何ヨリモ）こそかなしけれ

なきこふる間神のそほちるしぬきつへかてにかくこそ○○○（何ノコトナシニ）ハ雨め

石上ふるくのしからこそ言出（外ノコトナシニ）○○○こそハなあり又有らし

（拾）わかやとの世のひとしれぬ君しかこそ（外デハナシニ）○○○かなしはさしこそ○○○いるあ

大原やをしほの山もけふ（イツヨリモ）こそハ○○○神よのこともおもひいつらめ

又重詞をへたてゝ[ふこそハ]とよめる所[あれハ][あれさ]るとも

あるやてなるへし。後拾遺集にはるかにこそハ名乗

たけハ□くらのへま身にあしねえ。下なけきふのこすます

くなる也○元[こそハ]とよみて[こそ]と同じきぞ[平家]ふいへ

[とのゝしるをくれと]のこしいらんや[ことハつね]ことて[このひ]

をよむる詞なるも也。二詞よくえて見えてハその格とく

わかちしらめてあれと。今ハ格しきへて尺する也○[さきこそハ]

とくむ詞のむき[毛家]まうへし

[平家]

元[を]ハ上古よりハおそれとつかふとかへる詞なれハ。後世よりハ

[をやと]いふ脚もふかれハにゆるからこれかハ。又今ほかまつかや

何ゝをと。文につかへるもいかてへの格も何れもある詞也次ハよ

[かすきこそと]あくせむなちし

何を

（何ハ名目脚の麁未也。上世ハて往ハ今うてへ 二例○背一）

[かつきをと]いふ里言同し。しかをと云き也皆かなる詞也。

りといふは他の詞の麗をうけたるをといふ［のを］と里すへし

［をと］もし入りぬる詞のかはり此つゝきに傳ふる今略して

○第二［岩かきと］といふ［物をと］［あるものを］をといふへきとかいふ舍て

をとのとよめるに二様あり一首をうけ又あるひはふしを落かよ

詞をうくるは［あるをと］なるや里［おもやのを］といふ二説をうくる

［ものを］とのいはなるに又［ふと］よみたる事に里［のに］といふ

しら露の色はひとつをいかにして（ギヤ二）秋の木葉をちゞにそむらん

露をなとあたなるものとおもひけむ我身も草におかぬはかりを（ギヤ二）

又月秋はなにはのかたにさすらむ（ヌ二）けふこの浦をわけてそらめ

ほひまのためにしるしをまうして（カ）かしこのなをいはすてほりを（ヌノ二）

［ぬをと］（ヌノ二）［しをと］（タノ二）［じをと］（ニイノ二）［さりしをと］（ス二井タノ二）［なかりしをと］（ニテアツタノ二）おなしひ於

何てを　何〻　何とを　何〻　何子を　何

（上何は云れ其のさる心あゆひの例をみへし。下何は［誂屬］と［将倫］とのする事）

里言あるひは詞かし。心をえては徐我なるよろこびをもて。

［誂屬］は［そのえう］［将倫］は［このえう］と里すへし

（ヨ秋）きのへきてまさやけきはかゝのさくぬまてちりたりおそくはあらしとぞ（ソ方）おもふ

こひしくは下にを（ソ方）おもへ紫のねすりのころもいろにいつなゆめ

立よりて（コ方）みてをとりとりんかみ紫はあとよりこそも（ハ）まさらし

（秋）露ならぬわか心をはおきまよひぬれとも（ゾ）ちりてゆりん秋ををしき

拾遺にもてとるやとよめる例あり［将倫］の何同

何ゆのを

（何は禁の詞麁御おせ）里同又［のは］ともいふ。全くよつて［如しきを］

ゐ中に二様あり

よ川なよしむて人は見るめもなかれてうきなあるもの（ノ二）を

さらぬだにきぬ〳〵をしき人もなきを（ニ）行山姫乃布ほすらん

しかのをと（タノニ）ぬのをと（ヌノニ）めかをと（テニヤフノニ）けりのをと（タノノヤノニ）まし物を（ウモノヤノニ）あやなお

又人の方もなかりつ物を何そハ露のあらそ物をおもふ者

乃何をの二例にて・しず例にあれとも又を称すれ中もよし

物の字乃かはり 物隊 ものくし

何をも

（何ハ何をに同し）何をとも 何えとも字ありひとつさ○をれ・

里 何をこれし 何をこれし あるといふもの

秋乃夜の露をくはれて雁かねの声のあやしさをこひしくもあらん

あ月ゆのるかふすむ里乃秋のことはをとろきぬめに（ハ）ひうらみ

あきさ花の花を（コヽ）あまぬくちるるまいてとはらし

色のそる秋乃さき（コヽ）てもまかすとひ月わの花とふれ

あまの原みことろのとあま錦も松の中を（コヽ）けりる物のく

秋のくれの何と をとし をうきれくさへやうられハ明なか

何を とよむまうくれ をとれ といふまるれきをおかし 波家

乎しよ まりるえ みありもてなゆへし○ をの琴 をとのを

あ里ゆつくもつくもうくそなりくまつのめ何へ・かうくえ

いやうつてをうあり・又古今にちるといふことなうしいときむ

波家

出え めしハ 琴ろのを ともいへ給し

何ハ

（何ハ名所御歌の引〳〵麗沿同本魔伏起）ゆやすき詞也・物と引ちもてことわる也・

さらおくり物とをの詞とも語れ・里言にふかるれ〳〵のり故も

不及・くえしくいふ二例あり○弟一 ひしえ とらへ（名所の歌乃引麗詞もとうる）

（なり。御もこれになすらへし。仕状の詞をうくる時。里あそふらりて以下ろよハをそてよむへし）三柱あり。一若隠事乃詞をうけたるを里同。二状の詞をうけたる なり なりハ なと以て（以てしくハ よくハを）（の詞なり）三装乃引靡をうけたる のハ と以て（以て紀の きハのあさ）○第二 にそるえ として（装の同末靡伏にをうくる なり。御もこれになすらふへし）二柱あり。一装乃同靡伏をうけたるを里同。又によりてを によりて とも里すへし（以くそあれそ なかれの詞）又 と ともして。あるハかさとさし。見つくと花ちるなもの詞也。二装の末をうけたるハ うるハ てハ なとゝ以て。又状の経をうけたるを同し なりハ なとゝ以て（同しかくハ なもの詞也）

明ぬこのよも○ては世をゆる君のみ年をかさねつゝまよよむもつ也。仕引靡をうけたるハ。拾遺ハいかりしぬおのいとのられもむしろくれをもいまするゆきハ。これをそしめ

として。ばよろつの中臣乃人ハこゝみをよみて後拾遺にてハ長ありしおほやけしきなる詞のなかれく。近昔より後ハ見えさるへし○古今に例そハなくてあるかひまいつハ秋乃なりてるらん。後撰にハ。いつハ露のかゝる雨そふるかやうなるさまを○するほとにうゝやくらん家の色也○凡 そ ハ一首のはしをとして紀をうくる 名 あゆひ也。古き歌にみなやく紬よそ紀へくかて出る也。秋ハうきものとそ人なりあはれなりみえをとみえし。めゆむの今ハ紀薬ありぬへし そ なりしかすへてこゝ物を心面よりいひて以て詞也。拾波集乃詞書をとるに。色そなり。此将へし。かやうなると ものゝえ と以て

何も　何ハ名詞脚ノ離注也（末をうくるハ詠属ノ字）是にうしもこんもあるといふは、かくら
ねて示及ひ前かしこのあたりをとらへて引かへていふ詞也、猶ちかく
いへくらし麗をうけてハのもと是ハ、若御注をうけてハぞも
かどもともいふ

何も何ぞもとをきぬるハ、是ハ何もせよ何ぬすまはましとる文
見もらすも努めもあらし、けもの類也

何にや何　上何ハおなし同し、下何ハからあひ（疑属　きぬ中のやハ同く約めし）是こもも ハ前條の如く
心得へく やハまえとてやら含ま疑属にいふのことし
きしみは、猶ものてきこたびはやなむてきて人身あらその事なん
秋ちかくなれど、わかるらむ念ものさへてをやまかと世をむかしむ
又すまにて草ハかれかゝ隠るかとつまむまきく人のみそ猶ふさゝれは羽なん

何かぞ何　上何ハおなし同し、下何ハからあひ（曾家　あてし中のぞの下むね）是もをおなじく心得へく ぞを
あらしてて下にうに又ハ五條の儘とつかへて心得べし、猶前條の
うかゞふへし

後　天川あの何くらひそらくかこもあるありとも女にそめやくらん
大和　いるのやきらし今ある世にかゞめ夜のうちに富てうまくかれそつく
勢古　玉風をよせをわれてえねありへて思ふをのうちあれまでする

後條乃何もこそといふやうの詞の意をひふふるる也
おりくハうよかはハとあらまして、よあり

何もこそ何　上何ハおなし同し、下何ハからあひ（曾家　中のこその下まふ）三例○示一ありるもこそといふ
おる條よりかく今すこし猶よく推しあて、ゆめかゞ心得てこそを
あらしして何ともあるも何うてなもちやにと是すへし（曾家にられ　そのこそ也）

後拾）梅のちれし身かうそかつらむしやはこのぢらしむしろかれふども・・こそぬめ（一句ぞ三）

後拾）人からへのことしなしぬうかあまもこひすわれだもこそあれ（二句ぞ三）

○第二［ひのみるもこそ］といふ（上下のうけは第一よりうすぐ同をとつくる　つきて心の丸ころをとりてすゝむべし）かゝる事もあるふとむの人ていふのや。置二［何のなども何ことぢやよ］といふ

拾）玉かも遠なも。・・人ゆゑるとはめきらぬたらひさき

長秋）まちよひはわする萩の花しあみえやりてかまくなる露かれこそあれ（四句ぞ二）

○第三［何かこそ］といふ定そそ何か何ゆゑそハ何めるといふ附むこそ［こなそ何もわらぬずれ］といふ［さんばう何あまはとて］といふ定をもちて見たる。此詞中昔よりあまた中比の人といふ事をよあか［ひのあるもこそ］といふかへる人つねともちのまゝつくすよわてらふなすか

らつめえきそおらめ（ソレコソサウモアラウズレ）夏ふき人々をとりあとみ給ふのさひしさ

金）まナンバウこそこはすゝめえなれ（ナレバトテ）めとはふあめてられとるを為紀がれ［こそ］［こそハ］何のこそわよし［当家］まいふつこと［何もや何の］［何そそ何］［何ぞこそ何］ことの詞かかむもの東方御なるうらに［何もや］と［何もそ］のかそらハ詞そふかへる定をたをよめり。但［何もや］ハねのひねのかねあらまし何らつてよあり。［何もそ］ハゆくる程のうかうすゆ目合あるまじとふむつや［何もこそ］ハ右二乃定も、かよひ。又第二三事とくあるまじあまねハともいふ中○所もあれ切りとあまぬ事となむ詞のいまわひ所こそあまでいふ同じ、くつくハ［当家］まこ又

何まし

（何お事同し）［何もあまる］とひまあはせていつ所わせ

らむと・又時しまれをかくさむ也・おなじくハ次の句に詞とかさぬ

うけてよめり・里何ても何にでも又何にもよ何ぬでもちるよ又右

路なすらとうけて何よまれといふ時ハ只何でもといふ意し

君とゐてこまれ（ニモ）みそまれ（イデモ）のゆめつくしまれくにゆる恋

こゝみるをとらむも同し今まもおなしくかなわらかりうり

ひらくするとまれしむむとむかしまうるら・うゑべ・土左日記よ見まれ

かうこ見一やらくやりてん哉とあるか

何と何と

（上下の何次第の詞ちて多分手の継也・但多よハ下の何ハ開字とすることも多き）里何ゝ何ゝといふ

下何するとよめるは・なにそ何かり何なんぞり何かり何ぞなり

と里何すなは・ちもある居まてへくこそ哉・此家よくらよ

（坂）新撰月中なる梅（斧）をすなわち（ナンダリ）何なすまくしられて冬のそめすりける

（四季）よはうかう吹風になすらえては津のくるむあしぬみえこそ（ナニゾ）（ナニセリ）

いせ物語にも見ゆみあてそ見れとあとらぬ雅を御をとうけたる也・

らのはいちむいても同し何也・里よこそり何かりしてとふ

かくて三ろ三まりのうち・上の句を同してみるまにも何・

物語よも見えのうちに有るもあるぞ・此るも何なれと二のみり

皆同してこそまて・これをみとなることも・上のうけたる志し・

蜻蛉日記よも見ゆかくむかくしむかしかまりとよみたる哉也○

貫之集ゆくみゆるみえぬハ年くれて事のわりつかく

すみかくわかやうに何をよめり○万葉ニ今とも志けき

こらふるこをよふるはこれ時にはこれとも次の句の詞をかへて

さしみにあるは義隊のかくるなかりけり

仁家

何よ（何ハ右に御引歟社又やそ在のふり也状の末をうけて何人の事ハ／ある人の事をよむ事上つかへも中ひくとも中番より地ハまれ成る）何のよ

これは事と里云同じ手亦の中より物をやりすみてくらへて遠

こまのふくろ方亦をうけてハ里へといひくり邊家は又すそとも

いひ合ひける頼て、でと里候。又引藤をうけける時、舟まゆか

ては、のよと乃をとくらへて里すへし。安反引舟

何よ何（上下何事の字類也。上ハ詩也／下ハよみつきよりて前くなり）里するをいさみはいさみてかみくは

かみくるといはりさきひ同きこゆる。いさて公語あかるきねらふ

うつしきよりてよれくて、いはひき打る竹をいやふてへハ弓

をとも座りは重つのひかるゐめのを弓とやかとよ空りつるてをと弓

ひとえぬゆめのを、やまとつのいみはつて声あか里何くのわ河と

いよ（此時のよと同し／いはゆよるかなき）

後 ありとのみ言ひし風山の錦のさそひばかりきこえてあらす秋の

後拾 をしむ泉てかへりばかりはつれ物に風よちりてにとき月と

見よかりみかりて、里云のやうきこゆるにあかされと程

右よりいはひを下かなくそやいれへし

後於 ゆめのうこされ物きみ中にてあき風をきりで中あてきそへつるる

同 花ほかりこ花をとふそてるる物ながらて嵐のちらずよつる

又ぬ過ふそぬれ、わりよきれ山をちけゆりこれハなきまり

なとさ渦くのはゆゑをとあてりぬれくてよつくへし

何そて何のて（何ハ右状のかくて又／やそて在のふ事也）二詞全同里でまてとよ

後 うくひすのなくなりて志むしは（有子）て秋月たちつのあくすもあるか

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして（デ有テ）

山家乃花に鶯も来やれ今こそ盛にて口惜かり家（デ有テ）

開昔の風雨をとこそぬれにてとゞかぬをといひてゐると

ハ［にて］といふ事は世俗にあらぬことゝいふ也

［止家］

何と

詞のさしはさむところをまへにてあらす詞也。さるハ人の

詞とみるのゝの詞。又ハ名を定め事と云事。又は名を来ると

詞事となすわざしゆゑなづる中をのをあらす詞也よりうかふ

あかども伴ふにあるゆゑめくらして何事し。但もとにありてと某

［とゝ］どうきようりと云ふよりて何なといふハかさし也。此例にあらず。元

［何と何］のやうにへだてゝ此ぶ不同じ位なりにて上を

こゝの如詞下へつらなる詞あり。例をとりて知へし ［をと手］

或ハをへだつる詞なり。されハこゝの江流わかる里より

あるもかならずぬるべくいふ事なし。六例あり ○ 其一

［いつかと］にいふ（名頭脚紫の末 引麗をまく）とみるところを同じく言ゆ

のいひすか。里同。不及同前。此説ハ詞をへだてゝつけをとも

［とふ］まつはるくいふ事をといふつかへて後。又此説をえて合て

よめる歌をあげて ［とり］のあまくらへてあへしらちあそ（引麗をとる）

（小筒やまいねハないとつ里し。まそはとされいあひやう歌をもの文むかまし）［のとのおやゑ］とる里すへし。後撰よ

秋乃よの露をとて散る（嗅テ）露事しつかゝりぬありまかを合もしむん

あつまでわるゝ袖乃しゑぶ、ぬきてうらのみとなす（思テ）ゆく

まのかたはふ。ぶ。ぶ。をはゑをとぶ（云テ）らしてまゝの月のわかくるゝやき月日が何ぞ

末乃ふそきのみちいはくらし。侍ゝといふ初音ぬるをすぐしは

らぬはぬのいはゞみなみ。又とイヘヨ（トイヘヨ）どうそ（トイフナラバ）ころかうこえ（トイフナラバ）とあかなか（トイヒテアラバ）とようかなきわ（トニミテモ）

見れ抄。さて御をといきて、ぞくあくろり反ぞこ

うちいくの縁下よいてすなるあいけれ。も侍き やとかと

何や何と（何や何ハき ぬけのやや）ぬけのやや山三川せは【はむる】とゆ窓あかの詞乃

川めてあめそで。乃うまれ君こかゝられ伝【まろると】ころすとれ二

あかゝ【いろると】ハ【とう】のあまねみきとよ詞をとらへかをゝし。古

今よ恭ねるかのらまやをまとまうき。後撰くいろゝ撰やりまむ

まろく川うれいざて侍るあのもしあ文登とこれ侍ゝ乃いゝまをとなる

まてる鶏なかとしてあへし【鼓鷹 何のまゝ】とらうるあゝいのこゝるま

何くる也

鴬乃このまのねぐら梅をもきてはるくるやと。心三三

山家 ほきこえ山椎のしゝ栞のかむそむかくいてはけのいうなきこと。心三三

何のきあとよもとゆのある雫とやあかへ侍くるるの具へらむ。心三三

千文讀作讀 よゐまて立つるとぞやすくむむと 心三二 今ららむとうまたのめはりあむ

ころそと ハ【とう】のあまみいして構ゆるれてあをらなぞらびくいらくらか

うまて 麺りとみえそ雲も我ゝかの寝やまうみの物りかそて

わとのとみなるを也。世根と命もうへ報しは言わくのむ世遠古

いみくぬりやや。杯まは篇

又とそとうむも【又乃と】合れしと【かろ堂とそ】【根まとそ】【今まそ】

の三あか二【りる堂とそ】ハ出するとと【ト】とうむ中乃年をう根ま堂それがもよ

もあかの。犬うる云思為乃三と【と】よゝのハかゆよくあてころまて

の字の心なり

今とて（トシテ）露わけるのむすびてかへるをみれは[illegible]夜

二行めとては［とせよりてむすびてより］て[illegible]里住べし

久かたのひかりのさはりわかすかたを（トスルニヨテ）わかつらぬをみれは秋風との

[illegible]のなみのかたちあとなまてとまてしものそらに人やあるとて（ト思ニヨテ）

三［久かたとて］は［見ても］乃［も］かゝるまゝに里からはかまや

志つのをとて（トイフテモ）こゝろの月れくまとれ見は先なけの秋のあまの世中

花の字くいとこそ人をまほしめしりかしとゝそのねにこゝろき

［とても（トイフテモ）］［とても（ト申スモアナガチ）］［とてそ（トイフテ）］・・［はとそ（ハトイフテ）］［しとて（ヘイト思ニヨテ）］［すとて（ヌトイフテモ）］見えわか

又［何と何と］はこのさぬくよむ例あり［何といひても何といひても］

といひなり。古今の歌にあるとの月のあのちとい宇都瀬

也。又かくとなきならぬといふ事をんとよめるは、はや例の心得

あり。［と］をのせねたるはふるとあるを同し○いつも

ち見てゝ［と］ゝはいふなりてかなくいふ今まかせりたるの事

のちるときものまゝかねす今みなときそれ事の数々文字

ま［なそとも］はむすび見也○［と］乃字はいかの心持によりて後世ひ

おりし次の句にわかりらすまぐく好ともとみたてあり

（かゝきあひの傍書なり）

○第二［永のと］とて又名を聞とよつ猶と歌をぐ猶をとくて

いふを侍りし。例の［として］と同じく文［ほやの］てと宮へ

但し見へ［ま］くりけるひける御名かなく［おして］［有りて］世中ても文

或は［ぶ］とやいへてあり

わするゝとあれ悔しとことを今はたゞそらに秋やありとて人のたのまむ（二擧）（止）

きよのはらとよるへも馬やしかまの○みゆるこゝのかや月わたるを迄

人ふかき事をおもふとよむ事はゆてあそこの心なそ又かりか迄

末の句のなどをいふも一首にもある也、此類多し。上つ句のなど詞

ひとつめは今の事とよめり。説に何もあらむも今は一句也。又つゞきて

よくとかくとよむ詞を、大和物語にもかくはよめる同

○第三 とのみと とい（また思ひ御引 ）何ぞかは の意也。里言同。不及

引歌と御とおもふ 事と とは のき○てよむは常也。哉とわきなき

さそすてずむ也。下のあるしとわかるは あか

○第四 すゞると 又 いひとぞ といふ（御国ご大ふとよかく）とも の意也。皆常

とよめり。後撰乃 いはぬも よむおもひかへるにも 里言全く同。又

何てふと とは、いふ也。つひなどのあ は 何ぞはと るとも いふ。不及

何 なれど（ハイツヂャケレド） こそあれど（デアルケレド） あらめど（デアラウズレドモ） 古見古歌

赤染集に まてもさてとなのぬ也 いつはりとよめるはおひつきし例之

○第五 いつとと といふ（事の末はの御おもひ） ひとり條に ゆくすみてよむ。此も

とよむは同じ。里言は いつもいふは、このそよむものなり

金葉集 こゝしきに秋はいさとかぞへて こゝろもとよし 志るさめや

新古今集 たのめずに人をくら山あらしとは誰にかいさよひの月

玉葉集 あかすその春はいそぐと人しれぬ秋のゆくをゆるすといふらむ

○第六 ことこそと といふ（事の後をうけて、事例とつなぐ） ことこそ と つく事との

類。里言は ことこそ の何 ことこそ の何 といふ。但下に さ へなしある時

は、さあ何といふてはゝあるといひ、又 何と名のいふてはゝと も いふ

又下には「志倫」乃くつかへる時ハやゝ云て「さあ何といふ意に成て」ハ

と思ふべし

桜の花のさきてぬるかい（サア咲トテダンニ成ス）むかし桜そかへて草木の色のうつる心

（故）うき身とてふりと見すし（サア云ハトテダンニ成ウ）枝も見えぬとあし草木の色やあらん

（繁）かゝらうて人身すくれぬ何よふく志を得する（スルホドノ）事をとうしかたなるか

又「何とし何」とのもしよくろも同じ心の含すてつよかさゐかうそ

しくハ「志家」よいふ「何し何と」ホモあるまてハあるへし

（後拾）秋風にあひ（コブトイフ名タケダ）しあへて花散らまとまれ深山そぞある

いつまでかのもすくと見るもみての色ありしある（アルト名ノ付タノハ）ハ桜散て見る

古今の序によつ「ことし」いふるものにかゝるも是なり

何てふ

（何の修の一例に同）「といふ」をひきあまたある也上つよふへ「何ちふ」

「何とふ」といふもおなじ「何てふ」ハ「ちふ」「とふ」ともかよはして書合てさ

へ後世「てふ」とのみいふ、根にかへりてまた中昔の人の口ぐせなりけれ

よりかはるなるべし。今の世にあらねど、いひならはしたるべし

ぬのといふさへ「歌」をとりしといふに謡にハあるその古今てハ

ねふてふはすてかゝるとかの歌にハ又古しとる「哀」てすのそ

たのこゝろめてふといふ言のハにもたとふ「てふ」とのこゝろれなる「哀」と

いふのこそ人世のめかすといふ「哥」すてられし「とふ」とのこゝろれしるは、

例乃證なのあまりける事し、いせ物語よへくもあるす、古人

のよまのそてこそかはりしめあくしもあらんやうよおよ人

あるべしたいこてよい「てふことを（トいふノニ）」「てふものを（トいふノニ）」「てふ字（トいふ〇）」「てふなり（トいふハノイ）」「てふらん（トいふニテアランニヤ）」

お見なむ妙

てん てらし てけらん なと云句てよむべき皆 とらん とらし とけらん
のたぐひの詞也までといへるはてにをはの心にまでといふことを
うけたるいひ方のいひ残し一たびかれまでにいふと也かなし
但し重複して聞ゆるては古今集を捨られても とみえ には
うけれは後撰の中にあるとてうとしと見えはいつまての本には
てん といふてにをはを例の證本のまことなる事なし又捨ものとも嫌
のらや二かゝりてかくるはらの上居ちまたる様もこれより見え
おほえのことに極也例の にて をとこそふかくくらし似ることなり
私えの事はらてあるとおへていふにとの迄 何とは
何とは何も をもかくていふことをは注し訓点り
雖の字をもちむもしを略ル事し

何こそ

六例○第一 いつのとも といふ○第二 何のとも といふ
○第三 なにとてこそ といふ○第四 なへとも といふ○第五 いつとも
といふ（以上五例うけさまおなじの何との一二三と同じ例にかゝる事なり）一二三例まて只おもむき乃 何と の一二
三例は こそ のくりかへる也 こそ は 毛家 よりいふことく里同あひ
は こそ なとも と思ひて深くして四五例は 何との 思例よ
心全同 こそ の字かはるをなすこともいはてかゝるゝし皆不及沙汰
○第六は へうするとも といふ（字を詞とつてよむ何は若此様事の他册にあり也）里 とみ隠
ていふは とてかねては不用 事といふ事所有ていふ うするこ隠ては
るいへりるはと云ひ又 うけるとも るなるといふ字あひりをる
似けり称とも称とさこそよるなとおもひて上代のわる詞あれ
と信す事し改いひ非ものはらむも近昔より後をあらとて見えす

はしめのことはつよくいはんとて、さやうの詞の中におく詞也

後 秋にあまかつを川しとふ山本のことも（ユリタ段デハナイユリタ）みかめかるこゝろそて

同 世中はいはんとすとも（シラフストモ）いはぬやうそのかはりはかりかなしみこそすれ 秋

名任集 ぬし志らてされわかむしらぬそのものとも（モノダヤトモ）おもひおかみちを

源氏玉葛ノ二条とて女房あれはまゐりてもうれ

といふを里今昔物語にもあるのれとなりやといふ

はなてとかくかう

何とす 三例 ○第一 何とすといふ 事の未然ホとらく 里 せいして で字

すいはん何する をといひて跡なかに する の詞を例のかろくかへし

世をもしむ為をとし為なりてあまきかくる（ズイブンカリル、ケレジ）とすれとあるい跡なかは

てのやとく道をもなくまてはねなるかつて情あらん人をまつとも（セイダシテニッタ）あゝ

又あめとくすれとるまは里言も ハ の字をくはへて心得へし

○第二 かとす といふ 又 といふ（御と承） 里むかへて 何とするもせぬよ といふ

夜のよれあすを（トスルカセヌニ）とはれいかくあすかく一こともなくあるへしの也

又すゝる例ホなし猶考あるへし

○第三 未とす といふ（御とう字事り） 里同。又 とせすよ ともいふ

後 年ふるを行すんとにする折もにいとくこゑまつぬもかなしむ

秋ふるみくまいきましせしハ女郎花をくゝりさるはさこそ頼れ

泉式部集ノ萩あやにみゆやとすれるとよあるも 相備 と同じ

也。又 する をかろくいふ 全 あり。古今の詞書にあるも見えるん

とけるを日とよくはるる類也

第一例をすてふなしするなや。第二例ハ志のするとせぬとの

あるハ也第三例ハまへにしめすが如くかくさまになる
を思ひて只第三例乃ごとくなる也第一二例ハ詞を加
てやはらかなる物か訓点ハ将の字をもつてよむもあり
第三乃かや[する]の詞かなくて叶ハざる事也第三例ハよく
あらハれて第一二をも志る無し

七

志家

凡[し]といふ脚ハらし其志の乃いはあるか上つよく汝をし也
以るも其ものを西国にていはあるか御とあそふる心
をそへて[其方にて]といふ心をもちて見る無し

何し（何ハ名所装の注庇御也）此[し]を[志り]といふ[之身の][し]を[志らるゝ心]
とし人まのいひへるを[何]とも名乗りて下さまくすまうけいふ事

上代ハすへてあか古歌おやハよにて寸ゆゑてこそはにけり中昔より
後ハかゝる事[そ][ぞ][こそ][こと]なるもの脚を以ていひぬれハたゞに[何ハ]
ようやう異言まで[しぶかなつゞく][すゝつりと]あるといひつゝも
きかひよあまり随てくめ而あか文[そのやうに][ぞやうに]あると全
あれかこれしかし其志の乃かをかへてあつるなる[かくこ][かく志りし]
あとかなしをとうける時ハ異言で同しくかさねてこそ[かく][志りの]
乃いをわりくこそ異言ハうろとをふきて足ハ得へし汝乃
係しまいうてそこれくの異言ハうよろもをそのかニ無
あつ無し

何しぞ何（[曽家何て何て例あり]）上何おろ同し下何ハまつく上世の詞をねのいハれて（なお手にある例あり又[や]とよむ例あれと相かうれはこなう事）
志れしよまるすて[何ぞし]そのさうけたにてあかきえ合

こゝのこゝろをわかくこゝゆるか　かく無のさ雨なる詞なれは・心をつけてしれ

つきてことわりは清濁・序言にもいへるごとく し もハ清を

書しくはしくさす詞なれは・下の 何ぞ よりかゝりくるかくし

ちゑやかゝらぬかゆゑおなしさまそあるまてはおもひのあわけて（シ限ニコソヤ）

接 を以てさす渡のこゝろあるまし・いかなるなみのやうそそゝる（コノ二限ニコソヤ）

何こそ

（曽家 何そ何例の詞）（上何ある同し・下何ハ）詞の心をも條々よりわかくのこらす・いさゝか

かゝくはりけるめく そこ れ をはきそわかるへし・但 のこ して

う無こそ なるこそ 乃二のことてるわ

度 らにしたらたのけれかつくろまつこそ（二限テイツヨリモ）めのいろきけりみそくれし

於 うらしこそまほぬれにめえうれ（キツパリトイツヨリモ）はくまつこをかさ秋のといかなるかわ

は 影へらわけてまのみしれるくわへ（キツパリトイツヨリモ）しこれのきみかたなもそろめきをし

何か 何そ 何かく

（何ハ疑乃辞也）二の詞かはりのうちに

あつまちのさやの中山なかなかに何しか（コヤウニ）人をおもひそめけん。（ハジメタロウ）

疑 こゝにうきとめて（ジヤウニ）わかすめるに去家ちらくほとゝきす（ホノツヰニモ）山ほとゝきすを

何しか（ジヤウニ）く人をまてとくしもつ（ウツイワ）しつゝひまゆる・林かやかまそを

何ぞ

（何ハ何の像ヨ何）ぞ ハ詠するかはにるは 毛家 の も なけれ・二例○並一

荻葉ぞ といふ・里 も をかくやうてに・何よかなそ とも

詞乃より 何をるかなて 二の をあらくに といふハあるとよくみる

知へし　但若紫の朧をうけたるをは まろまろで 従をうけたるは かうかうて を まとめてや同へし　御なにハ ゝのまそて（鳥毛多イ二寫二カキツテ）又 何の方 なもとゆるへし

梅の花みにこそきつれうくひすのひとくひとくといとひしもをる

於 あまころしやとのみなされすけ人のかやしもあき（人モアラウニ君ニ限テ）としつつすみなし

すへらく しか をよしあそ・一首のうちにいてゝひ しか をよむ

うちとある也。右二首の定りにあらハ今ひとつを詞のかみによ

くみられよ。[しも]の心をとくえて見る也。されどもまれにハうる

つゝきをよくきゝてよめるにこそハ古今集にもあまた格や今の

まゝる今とよめる也。今一つハ格にはつらぬ又よくめでたき

へるも捨遺集にもあれど格しを人のまゝるかへといふなるよ

あるやうにそれし撰集このうたの○こゝまで集にもあれど格しもあれ

あるやうぞかくはつゝきなる所たゞやうにこそ古の歌中ぞう

[しも]をとこそ又古今ニ雨あるハあるもの也。右二首のおいては撰

集にもあれど花のさくらもつゝけて後撰集に格しも撰集也

いつよおもく歌の○乃ちもえさくらにおへりなめらむ乃二首ふれ

花のさかりにてもとつねのあるをかの歌。又後拾遺ニ

おなじかゝる歌へいくらもあれどいとめづらしき也

いはゞ古今に雨ふりて秋の野花あるのへにもとらねどとく

らして古今のたゞ時にもあれど格もあまたなるをいふ也

こそあまた格もこれわれとらへてといふめりひてよむ

詞なるべし。まやおもふことをいはずしておもてとうらあひたる

これなくてハなすまじき例なるべし ○伊勢物語に思ひし我

しるとうらめしきはめづらしき例なるか

[しかぞ]（二カギツテ何カ不知）[そこしも]（ハソノ方ニシテモ）[これしも]（ニコレニカギツテ）[これをしも]（ヲコレニカギツテ）[いかにしも]（イカニシテモ）等見ゆ。格ハ又かくし

をうけて[うへても][かくしも]なるとよむ例見ゆ。格又[しかしも]（おさへてよむ也）

○第二[かへるしも]とよむ（うるはあゆひかゝり也）[かくして][ちるをしも]

とよむ。又詞の上にめぐらして[あかがちほしも]と写す也いはで

いとへやらし

かきりなき思のまゝにをる花を時しも（アナガチ）・わかぬあやなかりける

いくよしもあらし我身をなそもかく（ソウヤウニモ）あまのかるもに思ひみたるゝ

林の雨露か下にこそ人をとひける華のつり（キソパリト）わすれにを・もむ

後 あのくれとき山吹いつれそめてしはみゆる（ソウヤウニモ）友によそれにけ

こしもあるかよ	アナガチ ○デモアリモセヌニ
すしもあらん	アナガチ ○ズニモ ウ
すしもあらす	アナガチ ○ズデモナイ
てしも何なくり	アナガチ ○テモ モセヌノ ニ

とそしもは何すやおもふらむ（アナガチ ○ト思ニモ ナンダッテ テアニフウカ）等見なし拾

何も

今しハなふつしハなきの時と（園ていと）思へし（をとらせの人 今しや今し）

（えやとよめるハかくハ冬ハえや今ハえや乃ふかるりを拵する例哥）又もしいかなれもとよむ時ハあなかち何

とはでもと思ひし・時しもハ同し心なわ

今しはと（ヨナツテハ）わひにし物をさゝかにの衣にかゝり我をたのむる

続古 うら風にまよふ（アナガチ）の思としいは（云デハ）なくれもなきのよるこそねられもせね

何し何そ

（上何ハ何の條ニ同し・下何ハ目来慶伏状乃性御事ナ）下何よみて二例をそへし

○並一 何ゝまハ中乃し といゝ（下何来又状の性ゐ時をいふ）しをとさへと思ふて

何そをと例よ出て泣へし 何さへ何事ぞ 又 何さへ何なるぞ

又つ○まハ 何さへ何すゝぞ ともいふ無し

来ふ名る吾てなく（廿ヘ）そこの衣ひね（イナラバ）のあさくハゝとゝ見えぬ紅し

拾長寄 君もまちこゝ見とやなる（廿ヘ）とおもしわろハ雑（ウナラ）もらぬよの

極（廿）はうゐん柿なる（タラバ）さ時やさらすれん花をそちらめれさへ枯めや

何しも何すも	廿ヘ ヌナラバ
何も何りせも	廿ヘ ウアルニモセヨタラ
何とも何りせも	ト廿ヘ ウアルニモタラバ
何しも何事も	二廿 デアルナラバ
何てしも何事も	二テ廿ヘ デアルナラバ
何もし何事も	廿ヘ デアルナラバ
何とも何ハ	ト廿ヘ ナラバ
何すも何ハ	二廿ヘ ナラバ

ある不拵

さへのつゆをとめるらしてゆうれそにもしくやすまうことあり・古今よ

済々の歌へバさこしかあるといふ事をぞありとする
事なりといふたるたくひ也○若にしかくといふぞ古今
れかいくよむ事也若はわか字は於い字はせつるかなむ・
皆質といふ字は、かうかく・逢合ゆのうはあるねゝおゆと
かゝへのうち候字はあはが字は梅ある極ある事といふ又六・全
いへへとしめ人のいふさも也・質とは若ぞ訓く事也さらく
嶽わずいふ若はずいくさへあるらハ乃はゆゑ・されば字はしと
いそぐ・たよ字かそとうくぶの・又和の縁ハ事とかくのゝて［八］と
うく〳〵こそわりなるを・近着ちかるを・口字は　わかる・字すき
ゆてよ・へき所はかは字にかくとよみく・下の詞をいふまでも
［し］のかうらんとも・むかむかたし・国中と派のうち事也・又

縁をとえにてとよみてえりあれ家とにある事ぞでつゝえて
えかしとよみ手らへき詞の要とおもしハ・さうすふ近着すぞぬ
私のさも也えにまかうなかれ、そこそ・源氏もしよろしくも・文
字しかき事といふもたにふ事てよむ事ハ・近くハやうりく
えゆ・着く字ゆわやもえそおさえれは事をやうにて上みれ
すへて都物事といふゆゑの［し］ハやすめ也やとかるをりする
定用の所とうす用きてまるかと・いふる中意なりととま
やすめりといふ事も・よくとよき入かひひつにてる若とき
えす（又下よ［まし］ハをうけたる字本格よあり・かわらぬ例なれどもいづき有す）
○才二［尺ゝ中の］といふ（下物同磨伏ある時といふ）わかくかるき二極あり・雑
きまゝ只、一例と同しく［し］と［さへ］と異寺［何へ］ハ異同・かりきハ

「し」をあくしいひて「なくらむなにが」事をふくみて畧す「何は」をと

「ふかく」と思はゞかりくかゝるきけらめそうらかきつらむよ

後 人のうへのことしいはゞ（廿）しぬれの身もひするおもこそあまた

（ヘモトヨリ）さゐふかめしなるを（ヒヨテ）かきくの花色さへにこそうつろひにけれ

まつとのいはゞぬれしら（十二ガ）きをしれとも人はしくまで（ヌニヨテ）は水やまなるべかわ

何をかの。（ヨ女）	何てし・何なれゑ（本ヨリ）（フヤニヨテ）	ぞゝ・あつゑ（十方デ）（ルニヨテ）
何をかは・何かはゑ（本ヨリ）（ヌニヨッテ）	只て・何ゑ。（サヘ）	おのし（本ヨリ 道理ナモノデ）おゝねゑ（ナイニヨッテ）
何ぞの・何ゑ（十方）（ニヨテ）	只ゝ・何あれ（本ヨリ）（ギヤニヨテ）	
何ゝ・何かはれゑ（本ヨリ）（イニヨテ）	にし何ゑ。（サヘ）	
何す・何なるかゑ（本ヨリ）（二下ナイニヨテ）	ぞゝ・何あるゑ（十方）（ナヤニヨテ）	

ほかゑ本抄

又「止家」何ゝその六例ようくあらくくゝ。かさ○羽おもろく「何ゝく何は」

とよみるをとよるくきう思ひてう消えぬりしり禁人はあるとも（よあめ）

○古今の序（ヨリ）にもいひしいへるものゝいはれのまゝをよみまゝりける

とのなるはいなるものをといひなむかとかゝりてゆける詞そ。

やのそ此例なりの一例のうちの手よりいへる辺首後のあはれなる

まうけるをよくひよるあらす○此例のみくおりまさに二様あるは

まめおもりのことをなりくいへるまくことわりのみそかくのん

をとりて只「ふくるそ」のいはよめてゝうのるをもてくへは病として

菜をさくのめそなかるをいひてことわりをかるくいひの文わとかり

よろし又藻をのこしてをるまゝなわるなはゆしゝくとくとうのいひか

なをといかえめ氣のまへをともいひ會すの是此例の二様や又菜をと

さへのまてなかれくとい八を一例のおしゑまうせいつれも端去

ていふのことく「その方にして」といふ金あり

あゆひ抄巻二終